

ヴィットリオ広場のオーケストラ

2007(平成19)年12月11日鑑賞〈東映試写室〉

★★★★★



監督・脚本＝アゴスティーノ・フェッレンテ／音楽監督＝マリオ・トロンコ／出演＝マリオ・トロンコ／フシン・アター／ベッペ・ダルジェンツィオ／エヴァンドロ・セザール・ドス・レイス／オマール・ロベス・ヴァリエ／アワリス・エルネスト “エル・キリ” ロベス・マチュレル／ジョン・マイダ／エスター・ナジバル／ガイア・オルソーニ／カルロス・パス／ピーノ・ペコレッリ／ラウル “クエルヴォ” スチェッパ／ジュゼッペ・スマルディーノ／エル・ハッジ “パップ” エリ・サム／“カウ” ディアリー・マディ・シソッコ／ジアド・トラベルシ／カルロ “ステリナ” ゴナ (オンリー・ハーツ配給／2006年イタリア映画／90分)

……この映画は、多国籍にして無国籍のすばらしいオーケストラが誕生するまでのドキュメンタリー。言葉の壁や音楽性の相違を乗り越えて生まれた演奏は魅力いっぱい。単一民族に馴れきった日本人は、こんな映画から、人種も、民族も、宗教も、国も、性も、年齢も超えたハーモニーを学ばなければ……。



ヴィットリオ広場とは……？ チネマ・アポロとは……？

ヴィットリオ広場とは、ローマ旧市街にあり、ウンベルト1世時代に造成されたエスキリーノ地区の中心部にある広場のこと。その周辺は、ローマで最も多くの民族が混在する場所で、少なくとも60以上の民族が共に暮らし働いているとのこと。また、そこではイタリア人がマイノリティーだと皮肉られるほどらしい。そこにあるイタリアにある最も古く美しい劇場のひとつが「チネマ・アポロ」だが、急速にまちが変化していく中、その劇場は今閉館されようとしていた。



アポロ11号計画とは……？ アポロ11協会とは……？

そこで、チネマ・アポロを守ろうと立ちあがったのが、「アビオン・トラベル」というバンドのピアノとキーボード奏者であるマリオ・トロンコと、同じくエスキリーノ地区に住んでいるドキュメンタリー映画作家のアゴスティーノ・フェッレンテ。彼

らは、人類の夢と実現という思いを込めて、その計画をアポロ11号計画と名づけたが、そこにもう1つ壮大な計画が加わった。それは、ミュージシャン、知識人、俳優、あらゆるジャンルの芸術家たちが集まり、多国籍にして無国籍のオーケストラを結成すること。

この映画は、2002年10月14日に行われた劇場救済の支持を集めるためのライブコンサートに始まる、そんなアポロ11号計画によって生まれた、15カ国30名によるヴィットリオ広場のオーケストラが誕生するまでの5年間を追った感動的なドキュメンタリー映画。遅まきながらやっと最近になって観光立国宣言をし、観光客受け入れに意欲を示し、観光庁の創設を決めたニッポン国としては、こんな映画から学ぶべきことが多いはず……。

最初はミュージシャン探しから……

オーケストラ結成のために、マリオとアグスティーノの2人が最初に始めなければならないのは、資金集めとミュージシャン探し。映画は資金集めの苦労を全然描いていないが、そりゃ大変だったはず。他方、ミュージシャン探しに苦労し、計画が頓挫しかかる様子はスクリーン上にははっきりと映し出されていく。

60以上の民族が暮しているエスキリーノ地区の中では共通語がないのだから、言葉で苦労するのは当然だし、そもそもどんな楽器でどんな構成のオーケストラにするのかを考えるだけでも大変。その中心にいるのはマリオだが、マリオがピアノとキーボード奏者としての才能だけではなく、オルガナイザーとしての才能と指揮者としての才能を備えていることが、この映画を観ているとよくわかる。まずはオルガナイザーとしての能力で、インド人、ブラジル人、キューバ人、イタリア人たちのミュージシャンを寄せ集めてきたが、さて、そのレベルは……？

指揮者としての才能も

ロシアから凱旋帰国した大阪出身の女性指揮者西本智実は、今や「日本一客を呼べる指揮者」に成長している。ネット情報によると、「オケを一度自由にさせてから、自在に転がし操るタイプの指揮者で、オケの実力以上の音色を引き出すことも特徴」とのこと。そんな目でこの映画を観ていると、マリオの指揮者としての役割は、真っ白なキャンパスの上に、自由に絵の具を選び、自由な題材で絵を描くことを任された

画家のようなものだから、西本智実以上に西本智実色を出さなければダメ……？

楽譜を読めない人もたくさんいるから、楽譜なしで音を合わせていくしかない様子。演奏レベルの低さと団員のやる気のなさに時々マリオはかんしゃく玉を破裂させていたが、奏者やボーカルの核となる団員が生まれたことと猛特訓のおかげで全体のレベルも急激にアップ。ぶっつけ本番に近い状態ながらも、何とかサマになりそうなオーケストラに。

こりゃ、すべてマリオの指揮者としての才能のおかげ。

中国人がいないのはなぜ……？

この映画のプレスシートには、「ただ残念ながら中国人はいない」という重要な指摘がある。それが単なる偶然であれば問題はないが、その理由が「近づきがたい彼らのコミュニティから何らかの共感を得るのは不可能だった」ということで、それが大問題。

中国人が世界各国に散らばり、中国人街を形成していることはよく知られているが、最近チベット自治区や新疆ウイグル自治区での漢民族の進出による漢化とその延長線としての民族浄化がよく報道されている。プレスシートは続けて、「しかし彼らが運営する中国製の靴やTシャツの間屋はじわじわとエスキリーノの街を覆いはじめている。地元住民の苛立ちをよそに着々と根を拡げているのだ。ほとんどの場合は右翼だが、彼らに対するデモンストレーションは今や日常化している」と指摘しているから、これはローマのエスキリーノ地区における民族浄化の1つのあらわれ……？

中国人が芸術に疎いわけではなく、中国人ミュージシャンもたくさんいるはずだから、なぜ中国人だけがこのヴィットリオ広場のオーケストラに1人も入らなかったの……？ 中国の人たちの意見を是非聞きたいものだ。

はじめて聴く演奏にうっとり……

この映画の見どころは2つある。その1つは、マリオとアゴスティーノによるオーケストラ結成までのプロセスの面白さ。何よりもこれが、島国で単一民族の日本人が学ばなければならないポイント。

もう1つの見どころは、この種の映画特有のラストの演奏風景。これはいわばコンサートで聴く演奏と同じような見どころだが、この映画でしか味わうことのできない



第4章

ひとつとして同じ人生などない

はじめて聴く演奏にうっとり……。楽器の名前もわからないし、歌詞も全くわからないのだが、その演奏はすごく面白く楽しいもの。

プレスシートによると、「現在オーケストラは、CD のリリースや年間100回近い公演をこなし、ますます活発な活動をしている」とのことだから、ヴィットリオ広場で始まった多国籍にして無国籍のオーケストラは、急速に全世界に広がっていったことになる。今まで聴いたことのない演奏を聴くため、是非映画館へ……。

2007(平成19)年12月20日記